

第3回指揮者交流プロジェクト報告

山本健二会員を派遣、指導方法と成果に高い評価を受ける

専務理事 加藤晴生

10月27日から11月3日までリーガにおいて第三回指揮者交流プロジェクトが行なわれ、当協会は山本健二氏（当協会会員、声楽家、合唱指揮者）を派遣、私と堀口大樹氏が同行しました。このプロジェクトの一環として11月1日と2日に、マスタークラスと、山本氏指揮によるリーガ大聖堂合唱学校少女合唱団（RDKS）によるコンサートが開催されました。テーマは「日本人の心とメロディ」。演奏会は本年5月天皇、皇后両陛下のラトビア御訪問の際、歓迎午餐会が開かれたブラックヘッドギルドで、補助椅子もすべて埋め尽くされた満員の会場で開催され好評を博しました。演奏会后、RDKS校長エレンストレイツ氏より私たち一行3名に夫々感謝状が授与されました。今回のプロジェクトは第1回と同様、リーガ大聖堂合唱学校、リーガ市文化局Ave Sol、アイラ・ビルジーニャ女史等によって実施され、国際交流基金の助成を受けた。

◇

日本には古くから美しいメロディがあり、子どもから老人までみんなが歌ってきたうたがたくさんあります。これらをラトビアの子どもたちに紹介したいと思っていたので、この案を実現することにしました。指導者には山本氏が適任と考え理事会に推薦し承認されました。選曲は3月ごろからはじめ、私たちが提示したリストをもとにビルジーニャ女史（以下、アイラさん）が10曲を選び、これに彼女の意向で信長貴富編曲のラトビア民謡「風よ吹け」を加えました。彼女が昨年NHK東京児童合唱団の定期演奏会で初演した曲です。

マスタークラスは第1回の時と同様【合唱マスタークラス】と位置付けられ、ラトビア全国から音楽教師、合唱指導者を集められて各種セミナーが行われました。アイラ女史は「このマスタークラスの狙いは、ラトビアの音楽家やその他の興味を持

つ人たちに日本の合唱音楽、民族音楽の伝統や伝統的歌唱の文化を紹介することにある。今回のプログラムの目的は互いの民族の相互対話、より深い理解、そしてアイデンティティの自覚を促すことにある」と述べています。このマスタークラスの参加費用は現地の物価水準などから見るとかなり高いと思われますが、それでも今回の参加者数は第1回のときの5割増でラトビア人の日本に対する関心の高さが伺えました。

少女合唱団に対する指導は合唱学校の正規の時間割の中で行なわれ、1回1時間半から2時間半、3日間行なわれました。山本氏は子どもたちが日本のうたらしく歌えるまで自身で何度も歌って手本を示し、耳で聴かせ、歌わせ、表現や日本語の発音でも外人特有の癖などを直すよう指導しました。歌詞の表現の指導も、例えば同じ冬の「朝」でも日本とラトビアでは違う、いろいろな表現の仕方を示したりしました。子供たちは肩叩きの「たんとん」とか「ピッチピッチ、チャップ…」とか擬音とか体感的な言葉が入った歌に興味を示しました。練習が終わっても口ずさんでいる子もいました。合唱学校の校長も同氏の指導法を高く評価していました。

◇

マスターコースでの公開練習の前に約1時間、山本氏は「日本人の心とメロディ～日本の歴史」と題して講演をしました。日本の成り立ち、日本人のやさしさはどうして生まれたか、自然への感受性（虫の音まで音楽、文学に取り入れてしまう）、異文化をとり入れてもそれがあたかも自分たち独自の文化によるものの如く変えてしまう特異性などから、明治政府の下で西洋音楽の導入に尽力した伊沢修二の話など、日本人の心の源泉について、堀口大樹氏（ラトビア語教室講師、当協会運営委員）の通訳で話しました。黒澤幸男氏（当協会常務理事）による「日本の



演奏会場になったブラックヘッドギルドの美しいクリスマスツリー。新年7日頃まで飾られる。リーガは世界で初めてクリスマスツリーを飾った都市として知られる。

合唱界の現状」と同氏の上記「講演録」を堀口氏がラトビア語に翻訳して聴講者に配布しました。

◇

11月2日午後ブラックヘッドギルドでのゲネプロのあと、同じ場所で18時より演奏会が開かれた。1941年に破壊され1999年再興、使用が開始されたリーガの議会広場で最も豪華な建物です。内装も豪華で美しく、音響もよく、音がやわらかく素晴らしいホールです。座席数240名、ホールの壁にそっておかれた補助用のソファ席を含めると約300名の席が満員でした。演奏会は岡野貞一作曲の「ふるさと」から始まり日本の歌は「雨降り」「早春賦」や「落葉松」など10曲、その内「落葉松」はジンタルスが歌いました。彼女ら

はこの曲をレパートリーに加えるでしょう。日本の歌の演奏の合い間に4回ほどラトビアで人気のあるマリンバ奏者Richards ZalupeとRaimonds Peterauskis(ピアノ)による日本の古謡「さくら」、童謡の「みかんの花咲く丘」などを使った即興演奏が彩を添え演奏会を盛り上げました。最後はアイラ・ビルジーニャの指揮により信長貴富編曲による「Put Vėjini」（風よ吹け）で締めくくられました。演奏会后マスタークラス参加者に対し修了証が授与されました。

合唱学校の校長エレンストレイツ氏は「この一週間の中で少女たちは自分自身の受け止め方で世界を考えるようになった。」と今回のプロジェクトを評価しました。



（左）リーガ大聖堂少女合唱団が笑顔で山本先生（中央）を迎えた、（左下）「肩たたき」の唄は子供たちに肩たたきをやらせて教える、（下右）公開練習には多くの聴講生が参加した



指揮者交流プロジェクトを終えて

山本健二
声楽家・合唱指揮者

ウィーン経由でリガへ行く。雲海をプロペラでかき分けるように着陸する。

カットイ先生とアイラさんとは2年ぶりだ。85歳になるカットイ先生は相変わらずかくしゃくたるもの。アイラさんも相変わらず美しい。

川幅いっぱい水を湛えて流れるダウガワ川の橋を渡る。橋の長さは1000メートルを超える。ここからの眺めは絵葉書そのものだ。その絵の中に入っていく。車で一気に渡るのには惜しいが歩くわけにもいかない。渡ると右手に宮殿のような大統領公邸があり、ラトビア国旗と大統領旗が翻っている。大統領は本日リガにおられるのだ。

旧市街は形と彩り個性的な建物が共通の美意識のもとに、石だたみの道を囲み込むように肩を寄せ合って並んでいる。私は絵葉書の中にいる。2年前もそう思った。石だたみの石はどれも丸く、その丸みは幾万々というリガの人々の足が撫でた丸みなのだ。私の肩の横をヒップが風を切って追い越した。世界のトップクラスのモデルの多くがラトビア出身という。長い足といくばくの上半身の上に小さな顔がある。女性を下から見上げる日が始まった。

今回、日本の歌を指導する対象はジンタルスと、そのジュニアクラスともいべきリガ大聖堂合唱学校少女合唱団である。といっても5～9年生の中にはもう見上げる子供達もいる。しかし3～4年生は本当に可愛い。私を見上げてくれる。神様はバランスを取ってください。

練習が始まった。美しい声だ。音程も気持ちいいほどの正確さで全員が同じピッチの感覚を持っている。しかし言葉の壁は厚かった。いかにも外国人が日本語を歌っている。アイラさんは練習が始まるまでの打ち合わせではかなり日本語の歌い方に自信を持っていたようで、ジンタルスの落葉松とあと2曲は自分が指揮すると言っていた。しかし発音を直し、日本語の歌唱法（歌唱技術）を逐一直していくうちに、文化の違いが大きいのでジンタルスの落葉松を含め、演奏会の日本語の歌の全ての指揮をお願いしたいと言いつつ出した。

一曲ごとに発音を厳しく直し、詩の背景にある日本人の心情、日本の風景、自然と日本人の一体感などを



山本健二さん
(旧市街ギルド大ホール前で)

細かく解説し、言葉の意味を伝え、その言葉の情感に合う歌い方を歌って聞かせ、それを真似させた。しかし予定された練習時間では仕上がらない。文化の違いとはいえ、あまりにも日本語の歌唱に対する認識が甘すぎた。こんな甘い認識では、日本語の日本の歌の演奏会はやれないとまで言った。クラス単位の練習、公開レッスン、リハーサル、それぞれの時間を延長することで私もボルテージは平静を取り戻した。

問題点は…(1)発音で顕著な違いは「エ」が「イ」になる。(2)楽譜上のひらがな（ローマ字）で例えば、「たとうべき」とあれば歌唱では「たとーべき」と歌うものをローマ字通り「tatoubeki」と歌う。実際には「tatoubiki」となる。しかしこれなどは、私の「花」を収録したCDを送っているのだから聞いていれば直っていきしかるべき。(3)日本語の歌詞と音譜上の割り振りがうまくいかない…落葉松の「から」が8分音符二つの1拍で、「まつの」が三連音符の1拍となっているが、日本語である故と思うが、うまく収まっていけない。私は歌って聞かせ真似させた。流石にジンタルスはどうぞん直っていく。(4)あとは日本語の言葉に合った情感の歌唱表現を聞かせ真似させるだけだ。

外国語の会話の修得、音楽の歌唱や楽器の全ては、先生が歌い、弾き、奏して、それを真似させることから始まる。合唱も声楽であれば例外ではない。私は3～4年生のクラスからジンタルスまで、繰り返し歌って繰り返し歌わせた。子供達もジンタルスも私と一体になって日本の歌の音楽作りに励んでくれた。特に嬉しかったのは「肩たたき」「雨ふり」を子供達が家に帰ってから熱心に自習してくれたことだ。それは親から学校に、子供がこんなに家で繰り返ししているのは珍しいという電話や、親が学校に来た時にこのことが話題になったという。この二曲を歌ってくれた子供達はいつまでも懐かしく歌ってくれるだろう。落葉松は



ゲネプロ風景（ブラックヘッドギルドのステージ）



マスタークラス終了証を手渡す

ジンタルスの主要なレパートリーとして世界各地で演奏されるだろう。

約130年前、日本に導入されたスコットランドの民謡は、今は日本の歌になっている。それらは日本の風土に同化され、独自の音楽（唱歌・童謡）を創り出した。自然を愛し自然と共に生きてきた日本人の感性が歌い込まれている。自然を征服してきた人々に、日本の歌を広めるべき時が来たと思う。今回のプロジェクトがその先駆けとなることを祈っている。

演奏会終了後、ステージで音楽学校の校長先生から額入りの立派な感謝状を戴き感激したが、それ以上に嬉しかったのは、3～4年生の子供達から自分で描いた絵や自分で作った粘土細工の花などをプレゼントされたことだった。素朴な贈り物では

あるが、心の交流の表われとして、子供達からの心の勲章として受け取った。演奏会場はアメリカ・ブッシュ大統領や天皇后両陛下がラトビア訪問の際の晩餐会が行われたホールで、中世にタイムスリップした雰囲気でも音も柔らかく響き心地良く彼女達も感動的に歌ってくれた。定員240の席は満員、更に壁際にもびっしり席を追加するほどの入りだった。

この報告は帰りのフライトの中で満ちたりた気持ちで書いている。最後にこのプロジェクトをご支援下さった方々へ厚く御礼申し上げます。またプロジェクトの実務を担当され、お世話になった加藤専務理事並びに自国語の如くラトビア語の通訳をして下さった堀口さんにも御礼申し上げます。

16度目のラトビア訪問記

加藤晴生

カットイ先生、若々しく活躍

27日夕刻リーガに着くといつものようにカットイ先生とアイラ・ビルジーニヤ女史が迎えてくれた。私のラトビア訪問も92年以来16回目、その内、第一回を除く全ての訪問で先生のお出迎えを受けました。ラトビアの方々との面談ではいつも先生がそばに居られて通訳やその他で暖かくお世話してくださった。今回は堀口君が通訳を引き受けてくれましたが、先生は常に立ち会って下さり、私たちに間違いがないよう見守ってあれこれと配慮してくださいました。これまで私たちとラトビアとの関係が順調にきているのは先生のお陰といつも心より感謝しています。先生はいまラトビア大学に復帰され週二日講義宗教を受け持たれ、とても80数歳とは思えない若さで活躍されています。

アイラさんとの対話から

アイラさんと当協会のラトビア側の窓口設定につき話し合いました。が、今回、彼女はかなり率直に、ラ



ジンタルスのステージで
(前列中央に指揮者アイラさんと山本氏)

トビアの音楽家たちは夫々各自が日本と個人的な関係を持っており、われわれのようなボランティアはこの国にはいないと言いました。これはある意味であたっていると思います。かんぐった見方をすれば、彼女が私たちを取り込むということかも知れません。そうなら、もう少し事務方を充実させて欲しいというのが今の私の気持ちです。

協会設立三年目ようやく本音の話し合いが出来るようになったと理解するのが適当かも知れませんが、兎に角、私たちもラトビア側の体制整備について考えなければならない時期に来ていることは間違いないと思います。

(3ページへ続く)

(前ページから続く)

お会いした方々

私達は現地滞在中、J.Vitols記念ラトビア音楽アカデミーの新しい院長、Artis Simanis教授、ラトビア作曲家協会 Ugis Praulins 氏、民族芸術センターDirector、Anna Jansone女史、リーガ市文化・芸術・宗教委員会議長 Helmi Stalte女史、リーガ大聖堂合唱学校校長 Janis Erenstreits氏、オルガニスト Vita Kalnciema女史 ほか面談しました。

音楽アカデミー院長Simanis 教授との面談は主としてユーリス カールソン前院長退任に伴う表敬。カールソン氏は作曲家、来年の歌の祭典の開会式(7月6日)で同氏の交響曲が演奏される。シマニシュ新院長はサクソンの名手。留学生の受入れ体制について話しました。音楽院では外国留学生の受入れはするが、EU内でのプログラムがありその基準を満たす必要がある。留学先の国語能力(現地人並み)が求められ、日本人の場合、ラトビア語が障害になるだろう。合唱指揮科についても同様。しかし、聴講生の受入れは留学生の受入れほど厳しくなく、合唱指揮科の聴講生は聴講期間終了後、一定期間ラトビア国内での合唱指導者としての活動を求められる。合唱

指揮科の陣容は教授、助教授4人体制。留学生、聴講生にたいする奨学金制度はない。その他、サクソフオン、オルガン演奏家の交流などについて話をした。

作曲家協会のブラウリンシュ会長とは当協会の創立5周年記念行事に関すること、著作権料のことその他について話し合った。民族芸術センターのヤンソンス女史からは同センターの役割、歌と踊りの祭典では中心的役割を果たすこと、古くからの民族文化の保存など幅広い話を伺い、この辺はあらためて報告したいと思っている。2008年のうたの祭典の楽譜は6冊の内、既に4冊が販売開始されている。おもしろい(?)話として、日本の和服着付け教室と同じようにラトビアでも民族衣装着付けセミナーが開かれているとのこと。リーガ市文化・芸術・宗教委員会議長のスタルテ女史は世界で200人しかいないリーヴ語を話すことが出来る貴重な方である。日本とラトビアの文化的共通点を話してくださりこの辺は機会を見てあらためて報告したい。日本人でリーヴ語を研究者がフィンランドに居られることも伺った。

Musica Balticaの社長セジャーネ女史とは楽譜出版のことについて話し合いをした。また、同社の楽譜カタログについているCDを当協会の



少年合唱団員が素晴らしいデュオ・ソロを披露してくれた



大聖堂合唱学校で(右から校長、カットイ氏、アイラさん、山本氏、ピアニスト、加藤)

HPで流すことが文書で許諾された。

リーガ大聖堂少年合唱団員のデュオとソロに感嘆

合唱学校での練習場には立派なピアノ、パーゼンドルファーがこともなげにおかれて、気軽に使われている。驚いたのは練習の最終日、校長とミーティングをしたホールには、それが2台。練習場ではボリショイ劇場で歌う少年二人がモスクワ行きの支度をして我々が部屋にくるのを待っていた。すぐにデュエットと夫々のソロを聴かせてくれた。そのうまさに山本さんは感心することしきりでした。彼らは歌い終わると直ぐに空港へ向かった。リーガ大聖堂少年合唱団は来年11月から12月にかけて再訪日する予定。当協会もサポートする。

◇

所属する合唱団員が、私達は世界一といっばばからない合唱団KAMERが、来年の歌の祭典直前に

世界の作曲家たちに委嘱する「太陽の光——地球は太陽の国」を発表する。日本からも作曲の応募者を推薦して欲しいとの依頼を出発直前に受けた。

私たちが出発する直前、ラトビアでは内閣の一部リジャフルが行なわれその後10日間程度で4人の閣僚が交代し、文化大臣のデマコーヴァ女史は一時外務大臣も兼務しました。

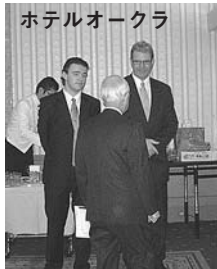
ラトビアは訪れるたびに新しく変わって特にEU加盟後の進展には著しいものがあります。街もすっかり明るくなりました。今回驚いたのは通貨ラツツの高いことです。昨年1月訪問したときは1ラツツ200円程度でしたが今年は街の両替屋で250円程度でした。旅行者には厳しいレートです。もう一つは交通渋滞が日常茶飯事になっていることです。遅刻の言い訳にも使われているようですが、この方はまだ日本の比ではありません。

駐日ラトヴィア大使主催 平成19年ラトビア独立記念祝賀レセプション

11月16日

ホテルオークラ

11月16日午後6時半より8時半まで、ホテルオークラにおいて、P.ヴァイヴァ



来賓を見送る大使

ァレス大使主催によるラトビア独立89周年記念祝賀レセプションが盛大に開催された。今回は、昨年在日大使館が開館されて以来第2回目の式典となったが、300名以上多数の賓客が来訪し立錫の余地がないほど盛況を極めた。会場前のホールには写真家古川透氏が撮影したラトビアの写真が展示され来客の目を楽しませた。

今年は、5月に天皇皇后両陛下がラトビアを親善訪問されたことを反映して、宮内庁、外務省の高官多数の姿が見られた。また政界からは日



本ラトビア友好議員連盟の斉藤斗志二衆議院議員が来訪した。このほか大使が精力的に各界の代表や日本各地を歴訪したこともあって、沖縄、北海道、福島、横浜、静岡、大阪、神戸、北九州市、徳島など遠路各地から多数のゲストが駆け付けた。全国各地からこれほど多くの人々が大使館レセプションに駆けつけるケースはとても珍しい。また多数の実業界代表、外交団の他、NHK、共同通信、ジャパン・タイムス、神奈川新聞、徳島新聞などのメディア陣も多数出席した。今回のレセプションの特徴の一つは、ヴァイヴァレス大使の肝入りで会場の選択やすべての事前準備について周到な手配が行なわれ、その「もてなしの心」が発揮されたことであろう。テーブルにはラトビアから空輸で取り寄せたチー

会場は300余名の来賓で賑わった



ズ、ビール、バルサムがたくさん出された。オークラの会場の雰囲気も大変よく、出席した各界代表からも素晴らしいパーティーですねと褒め言葉が寄せられ好評であった。また帰り際にはこれまた大使のアイデアで、ラトビア名物チーズと香料石鹸の入ったサプライズ・プレゼントが手渡され来客を喜ばせた。大使館レセプションが盛況か否かは過去一年間の大使館の活躍振りを計るバロメーターと言われるが、大盛況であったことは参加者のご協力の賜物であるとともに大使館の活動が軌道に乗り始めてきたことを証するものといえよう。

主な出席者(順不

動): 藤井威日本ラトビア音楽協会会長、加藤晴生同専務理事、他音楽協会役員・会員多数、大塚清一郎前ラトビア大使、翁長在那覇ラトビア名誉領事、大鵬薬品猿田専務取締役、板垣忠雄福島県芸術文化団体連合会副会長、山本徳行北九州市ラトビア支援の会会長、マクナマラ・ケイコ女史、小磯明日本ラトビア協会理事、松原千振常務理事、ボニージャックス西協理事、北海道東川ラトビア交流協会のみなさん、川島泰彦日本ボイスカウト富士地区国際委員長一行、徳島新聞編集長、歌手小田陽子女史、日本庭園設計家榎野俊明住職他多数。(ラトビア大使館提供)

LATVIA NATIONAL DAY

Rapid growth marks Latvia as the perfect economy

By PETERIS VAIVARS

The Latvian people's love of their land and their sense of responsibility for the future of their country is the reason why Latvia is the perfect economy, according to Prime Minister Valdis Kucinskis. This is the message of the Latvian National Day, which is celebrated every year on October 18th.

Latvia is a small country with a population of only 3 million. It is a member of the European Union, NATO, and the WTO. It is a country that has achieved rapid growth and is now one of the most developed countries in the Baltic region.

The prime minister has emphasized the importance of maintaining the country's high standards of living and the environment. He has also stressed the need for Latvia to continue to improve its economy and to attract foreign investment.

Latvia is a country that is full of life and energy. It is a country that is proud of its heritage and its achievements. It is a country that is looking to the future with confidence and optimism.

ジャパンタイムズ紙に大使のメッセージ掲載
(4面に日本語翻訳で全文掲載)

ラトビア独立記念日に当って

経済急成長を遂げているラトビアは優れた経済パートナーです。

駐日ラトビア大使 ペテリス・ヴァイヴァルス
(11月18日付ジャパントタイムズ掲載)

ラトヴィア共和国の独立89周年記念日に当り、ラトビアのH.E.ヴァルディス・ザトラス大統領とラトビア国民に代り天皇皇后両陛下と福田総理大臣閣下に深甚なる敬意を表します。また歴史に刻まれた日本国民が示した親愛なる友好の情とご支援に対しまして心からの敬意と感謝を捧げたい。2006年4月、ラトビア大使館が東京に開設されたことで友好関係に新たなページが開かれました。

この1年を振り返りますと、両国の相互関係はいままでにない強固なものとなり、去る5月の両陛下首都リガご訪問によりまして最高潮に達しました。この出来事は、両国間の政治、経済、文化面の交流を深めることになりました。

両陛下のご訪問によりまして、ありがたいことに、ラトビア国民の音楽好きなのが注目されました。というのも、若者と年輩の合唱団が両陛下にラトビアの歌をご披露する栄誉に浴したからです。本紙読者の皆様に記憶に留めていただきたいのですが、歌手で文化大使でもある加藤登紀子さんがヒットさせましたポピュラーソングの「百万本のバラ」は、正真正銘ラトビアの歌なのです。両

国間の交流のために派遣された音楽家の方々はラトビアの伝統とラトビア人の歌好きを相互に認識し、盛り上げてくれました。特に、日本ラトビア音楽協会の合唱団は音楽をとおり友好を深める活動を日本とラトビア両国において活発に行っています。

ラトビアは人口わずか230万人の小さい国でありながら、幾つかの大規模な一流オーケストラ、オペラハウス、バレエ団、著名なクラシックと他分野の音楽家を擁しています。我が国の評価の高い幾つかの大学は、幾多の分野で高度な教育と世界をリードする研究を行っており、そこには日本文学・文化も含まれています。

幾つかの大学で常に多くの学生が日本文学・文化を専攻学習しています。リガにはラトビアの日本に対する関心の高さを示すように全日制の日本語学校があります。

政治の面におきましては、アイガルス・カルヴィティス首相が2006年10月に再選され、1991年まで続いた中央計画経済をよりダイナミックな近代的競争力を持つ市場経済体制に移行させるべく広範な経済改革を実施しています。

ヨーロッパ連合（EU）、北大西洋条約機構（NATO）、世界貿易機関（WTO）の加盟国としてラトビアは、銀行・証券分野、ITをはじめとするサービス産業にも力を注いでいます。

カルヴィティス首相は、日本びいきであり、数次の訪日歴がありますが、2006年4月には首相として来日いたしました。

首相がリーダーシップを発揮した政治的進展の中でもっとも際立つのは、EU諸国との関係強化と東側国境諸国との安定した協力関係の構築に成果を挙げていることです。

今やロシアとの間で国境を巡る争いはなく、ラトビアはCIS（旧ソ連諸国）との経済関係と貿易を急速に拡大させています。このように、我が国は周辺諸国とバランス良い関係を保っており、世界の政治・経済面で主導力を持ち、バルト諸国と信頼できるパートナーとなることに関心を払っています。

このような対応は経済と金融面で見られます。教育水準が高く、技能と目的意識が優れ、労賃が相対的に低いラトビアは、情報処理、銀行・証券業のサービス事業や物流拠点に適しており、個々の企業が必要とする法務と会計両面の法令順守の管理にも対応できるものです。

さらに、ラトビアは林業が盛んであり、政府が環境の研究と開発に力を入れたお蔭で環境技術が進み、林業を支えています。その関係でラトビアは日本の官庁ならびに民間の環

境研究機関といっそうの協力を進めたいと願っています。

実力に見合った急速な経済発展に伴って、三つの主要不凍港を持つラトビアは、ヨーロッパとロシアを結ぶ戦略的な集散地となることができまます。日本の製造業と関連部品企業は、これら主要港と工業地域近辺に立地するメリットを考えてみてはいかがでしょうか。もちろん技術を持ち、経験豊かで、言語能力の高いサービスを提供できる労働力があることもメリットです。最近の米国住宅産業に絡む金融問題が招いた景気停滞は一時的なものと考えられ、ラトビア経済はバランスの取れた経済改革計画の下で高成長と効率向上を続けています。

最後に、東京に2006年4月開設されたラトビア大使館の初代大使として日本の皆様がラトビア各界各層の訪日者に示してくださったご親切とご厚情に改めて厚く感謝申し上げます。願わくば今度は、日本の皆様がラトビアを訪問くださりそのお返しをする機会を与えてくださいませんか。ラトビアへの観光旅行は無限に楽しめる可能性を秘めています。また、日本同様に環境に配慮した観光も盛んになっています。

ジャパントタイムズ紙上に来年寄稿する際には、美しい国かつ日本にとって経済的に重要な国であるラトビアへの訪問者が幾何級数的に急増し、私自身が驚くような記事を書けるようになりたいと心から願っております。（翻訳：中嶋勝彦会員）

万物は流転している

アヴァナ・イネセ（ラトビア）

4年前ラトビア大学で日本文学を勉強し始めました。そして2年前日本に留学した時、これま



で知らなかった新しい日本、沖縄を発見しました。その時から沖縄が好きになり、今回は沖縄の民俗学を勉強をしに2度目の留学に来ました。「沖縄の伝説とキジムナー」に関する研究をテーマとして考えています。キジムナーに夢中になりすぎたせいか、今では友達や指導教授に「イネセは、キジムナーに似ているね。」とまで言われるようになりました。

ところで、なぜ沖縄を留学先に選んだかという点、沖縄は豊かな自然に恵まれていて、独特の文化を持ち、そこで生活する人々も優しいからで、その上、沖縄はラトビアと似ているところがたくさんあるからです。それはチャンプルー文化であり、戦争体験であり、豊かな自然に恵まれている点です。気温も同じように30度になります。ただ一つ違うのは、気温に+がつくか-がつくかという点です。

さて、2年前の留学生生活を振り返ってみると、色々な楽しい思い出が頭に浮かびます。友達と一緒に様々な新しいことにチャレンジしたり、ビーチで流れ星を見ながら、夢を見たり、旅行したり、一緒に笑ったり、泣いたりしました。その時の一年は、大きな冒険をしたみたいでした。今まで体験したことのない沖縄文化を学ぶことができて、とても楽しかつ

たです。本当に夢みたいな世界でした。その夢を追いかけ、また沖縄に来ることにしたのです。

しかし今回の留学は前回とは少し違います。今回はただ夢をみるだけではなく、夢を実現したいと思っています。私が沖縄にきて、ラトビア人だと自己紹介をすると、よく「ラトビアってアメリカのどこ？」と聞き返されます。また「ラトビア、知ってる！知ってる！」と言う人がいて、「やっと！」と思ったら「南米でしょ？」と言われて、ラトビアのことは、まだまだ日本に浸透してないなあと感じました。そこで私は日本人の人に、もっとラトビアの文化など様々な情報を提供し、逆に日本の文化をラトビアの人に伝えたいと考えています。つまり、それは文化交流のキャッチボールです。一人で壁に向かってするキャッチボールよりも、相手のいるキャッチボールの方

がずっと楽しいのと同じで、日本もラトビアもお互いに文化的なキャッチボールができれば、文化が交流でき、関係を深めることができると思います。そうするために、これから沖縄とラトビアの橋渡しとして頑張りたいと思っています。それは今回の留学の目的の一つです。前の留学と比べてみると、今回の留学の世界は現実的なのです。

最後に、同じ沖縄という場所に再び来ても、同じ留学生活、経験ができるわけではありません。そこにいる人も違いますし、時間の流れによって場所そのものも変わっていきまます。それから私自身の考え方も夢も前と異なっています。ヘラクレイトスが述べたように、「万物は流転している」と言えます。確かにそうです。でも変わりゆく物に身を置くこと、それも留学の一つの魅力ではないかと思います。

最近の日本・ラトビア関係

駐ラトビア臨時代理大使

久保克彦



2007年5月の天皇皇后両陛下のラトビア御訪問は、日本とラトビアにとって歴史的な出来事であり、新時代を拓くものでした。両陛下は、フレイベルガ大統領、カルヴィーティス首相等政府高官を始め、多くのラトビアの人々により温かく迎えられ、その様子は日頃のご動静とともに、当地メディアでも大きく報道され、御訪問を契機にラトビアの人々の間に日本の歴史や文化に対する関心が著しく高まっております。

このような中、ラトビアではラトビア側の関係機関・者と連携協力しながら、日本関係の交流事業を頻繁に行なっています。日本の合唱団の公演、恒例のリガ日本映画祭、日本陶芸展、武道のデモンストレーション等が行われ、何れも好評を博しています。日本語学習・日本研究も活発で、ラトビア大学では100名の学生が日本語・文学を専攻し、リガ文化学校（公立学校）では日本語を学ぶ中高生も沢山います。また、我が国の国費留学生プログラムにより多くのラトビア人が日本で学んでおり、両国間の青年交流も恒例化しており、毎年、ラトビアと日本の青年が相互に訪問し、次代を担う青年間の活発な交流が行われています。

政治レベルでは、2006年新たな外交関係開設15周年の年を迎え、活発な要人交流が行われましたが、両陛下のご訪問以降においても、田中・財務副大臣や斉藤・日ラ友好議員連盟副会長の訪問、政府間の政策協議などが行われました。このような要人往来を通じて、両国間の政治対話が進展し、両国は民主主義と自由主義市場経済など基本的価値を共有するパートナーとして、二国間関係及び国際場裡において協力関係を順調に発展させています。ラトビアは国連改革と我が国の常任理事国入り、国連及びその他国際機関における各種選挙への我が国立候補を支持しています。更に、拉致、核など北朝鮮問題について、北朝鮮と外交関係を有するラトビアは、国際社会が一致して断固たるメッセージを発出することが必要とする我が国の立場を理解し、支持しています。

経済分野では、貿易は全体の中で対日貿易の占めるシェアは低いものの、輸出・輸入ともに拡大傾向にあります。投資面ではラトビア政府による日本企業誘致へ向けての熱心

な努力が見られています。日本からの対ラトビア直接投資は未だ小規模ですが、日本からの産業投資促進を重点活動の一つとして、ラトビア側は、昨年（2006年）に引き続き、本年6月、日系企業を対象に、対ラトビア投資のためのセミナーなどを開催しました。

◇

（今日、独立を回復したラトビアは、独立回復後初めて要職についた若い指導者の下、国造りに取り組んでおり、政治経済制度の民主化、自由主義市場経済への移行に成功、今日ではEU加盟国中で最も高い経済成長を達成しています。ソ連体制下、長く放置され、廃屋となっていた多くの由緒ある建物の復興工事が着々と進み、今日、リガの街並みは見違えるほど新しく明るくなり、ラトビア人は颯爽と街を闊歩し、自由を喜び、希望に満ちた国の将来への期待に輝いています。しかし、インフレの昂進、不均衡な経済発展経済発展と貧富の格差拡大など影の部分も顕在化しつつあります。社会主義時代の社会保障が大幅に縮小され、高齢者等社会的弱者の生活は苦しく、社会制度や価値観の変化に対応できない人々の自殺やホームレスの凍死も多くなっております。また、EU、NATOメンバー国として対欧米諸国関係を重視しており、ラトビアにとって日本は特別の国ではなくなりつつあるように思われます。

しかし、日本とラトビアは長い歴史と伝統に根ざした友好協力関係にあることに思い致すことが大事です。我が国は、1918年のラトビアの独立に際して、英、仏、伊とともにいち早くラトビアを承認しました。この後、北欧諸国や米国等の主要国の承認が続きましたので、日本は最初に承認した国の一つであり、このことは、ラトビア人の記憶の中に深く刻まれており、フレイベルガ大統領の天皇皇后両陛下歓迎午餐会のスピーチの中でも言及されました。第2次大戦前の1929年にはリガに大使館が設置されました。1991年の独立回復の際にも我が国はいち早くラトビアの独立を支持し、同10月10日には新たな外交関係を樹立しました。）

◇

ラトビアの独立回復以降、日本・ラトビア関係は順調に伸展してきました。日本は、ラトビアの歴史、文化、伝統に対する理解を深めています。ラトビアでは、古くからの自然信仰が息づいており、歌と踊りを通じて民族としてのアイデンティティを確かめ合い、この「歌と踊り」（ダイナ）は今日も人々の心の中に浸透し、歌い継がれています。5年毎に開催される「歌と踊りの祭典」は国民的行事となっており、2003年の祭典には日本の合唱団も参加しましたが、2008年の祭典にもラトビアの合唱団との新たな音楽協力の企画が進んでいます。11月リガで開催された、日本人指揮者・山本健二氏によるラトビア合唱団の演奏会は聴衆の心を打つものでした。10月、シベリア流刑慰霊公園建築デザイン・コンテストへの入賞した桝野・多摩美術大学教授の庭園デザイ

ンも日本人とラトビア人の心を繋ぐものです。今、北海道東川町はルーイエナ町との姉妹都市交流の計画中ですが、これが実現すればリガ・神戸に次ぐ二つ目の姉妹都市交流となります。他方、経済面では本年9月日本のトップ財界人をメンバーとする民間外交推進協会のミッションがラトビアを訪問、短時日の滞在でしたが、大統領、首相、外相、経済相、運輸相代理と会談し、空港、港湾など経済施設を訪れ、意見交換を行ないました。この交流は日ラ関係の将来への展望を予感させるものでしたが、具体化には「経済の論理」も考慮されなければなりません。

人々の心と心を繋ぐ文化交流は、それ自体意義深く、将来への展望を拓くもので、日ラ関係の新時代を拓いた、両陛下ご訪問後の交流に「幅と深み」をもたらすものと思われます。

吉田茂も重視したラトヴィア情報

外務省外交史料館

白石仁章



11月16日、ホテルオークラで開催されたラトヴィア独立記念日のパーティーに今年もお招き頂いた。昨年以上の盛況ぶりに、この1年でラトヴィアに対する関心がさらに広まっていることが実感でき嬉しい限りであった。

以前、本誌第6号にラトヴィア独立記念日の由来を書かせて頂いたが、その際に戦前の日本が対ソ情報収集のためにラトヴィアを重視し、バルト三国では唯一ラトヴィアに大使館をおいて、ソ連通の優秀な外交官達を送っていたことについて説明した。この件については、折を見て具体例を紹介していきたいと思っていた。今回はその第1回目として、戦後に総理大臣になり、日本外交に大きな足跡を遺したあの吉田茂が、駐イギリス大使時代に対ソ連問題に関して駐ラトヴィア臨時代理公使の意見を参考にしていた例を紹介したい。

1935年から36年にかけて、ヨーロッパ在勤の日本外交官達の間では、ソ連がイギリスに急接近しているという情報が流れた。当時の日本は、1933年に国際連盟から脱退していたが、“反共産主義”を標榜することにより、諸外国との間に共通点を見だし、そこから協調関係を維持しようとしていた。それにもかかわらず、ヨーロッパ諸国の中でも長年日本と親密な関係にあったイギ

リスにソ連が急接近するということは、日本にとっては“脅威”以外の何ものでもなかった。

では、何故このような情報が流れたのだろうか？きっかけは、第二次世界大戦中にイギリスの外務大臣を務め、戦後には首相にもなったアンソニー・イーデンが1935年にイギリスの首脳としては初めて訪ソしたことにあった。当時イーデンは弱冠38歳であったが、国璽尚書（無任所大臣的な役職）としてジョン・サイモン外務大臣を補佐していた。そして、同年3月にサイモン外相とともにドイツを訪れ、ヒトラーなどと会見することが決定すると、イギリス駐在のソ連大使イワン・マイスキーが、この機会にソ連も訪問することを強く勧め、結局イーデンが訪ソすることとなった。このイーデンによる訪ソは、確かにイギリス・ソ連間の友好関係を深めたが、その後「ロンドンで開催された英ソ平和親善会議大会において対ソ関係改善が重視され、具体策として対ソ連向け投資が提唱された」など、両国の接近を伝える情報が続々とヨーロッパ在勤の日本人外交官達から寄せられた。

そして、そのピークは、翌1936年1月イギリス国王ジョージ5世の（次ページへ続く）

(前ページから続く)

崩御後に訪れた。ソ連の新聞は、従来の同類の記事に比べ非常に丁寧に同国王の崩御を報じ、また、ソ連からマキシム・リトヴィノフ外務人民委員(外務大臣に相当するソ連の役職)などが同国王の葬儀出席のためイギリスを訪れ、ロンドンおよびパリにおいて盛んにヨーロッパ各国首脳と接触していたことが度々ヨーロッパ在勤の日本人外交官達から報告された。特に、当時スウェーデン駐在の公使であった白鳥敏夫(1938年に駐イタリア大使となり、日独伊三国軍事同盟締結を熱心に推進し、戦後連合軍によりA級戦犯に指名され、終身禁固の判決を受けた)は、「イギリスは日本に対する関心を失い、ソ連と結ぶつもりだと観察する者が多い」とした上で、「この際、日本政府も中国問題だけに関心を向けず、欧米の問題にも注意を向けて欲しい」との意見を電報にして送ったほどであった。

しかし、同年6月に駐イギリス大使に就任した吉田茂は違った。彼は、この年起こった有名な二・二六事件の後に総理大臣となった広田弘毅(吉田とは明治39年=1906年の第15回外交官試験に合格した同期にあたる)内閣の外務大臣に擬せられたが、陸軍の反発により(吉田の岳父牧野伸顕は「親英米派」と目され、二・二六事件の際にもターゲットの一人として狙われ、湯河原滞在中に襲撃を受け、危うく難を免れたほどであった。それゆえに、牧野の女婿であった吉田は陸軍に忌避されたのであった)外務大臣になれず、イギリス大使に任ぜられた経緯があるが、ロンドン着任以後、対イギリス関係改善に向けて精力的に各種工作を展開していた。その吉田の目には、「ソ連がイギリスに急接近」しているという情報は疑わしく映り、9月21日、ラトヴィア駐在の佐久間信

臨時代理公使(当時、日本はまだラトヴィアに正式な公使を派遣していなかった。翌1937年に佐久間は特命全権公使に任ぜられ、エストニア、リトアニアを兼轄することになるが、その件に関してはいずれ紹介したい)に電報で意見を求めた。佐久間は、同23日、ソ連が西からのドイツによる「脅威」、東からの日本による「脅威」を牽制するため、ことさら「対イギリス接近」を誇大に宣伝しているとの分析を報告した。

吉田は、佐久間からの報告を受けて、10月1日、ヨーロッパ諸国の動静に関する観測を電報にして本省に送った。それによると、ヨーロッパ情勢はドイツの動向を中心に動きつつあり、それに対してイギリスは、ドイツの敵国に回る意向も有していないが、ドイツと敵対的関係にあるフランスとの間の伝統的な親善関係は重視している。しかし、フランスがドイツに対抗するために友好関係を深めつつあったソ連(フランス・ソ連間には1935年に相互援助条約が結ばれた)との間には、緊密な関係を構築する意向を有していないとの内容であった。

吉田は、当時その締結に関する風説が流れ、11月25日に実際に締結されることとなる日独防共協定が日本・イギリス関係を悪化させることを恐れていたようだ。それゆえに、イギリスとソ連の接近を過大評価し、ソ連と対抗するためにドイツと結ぶことを「危険視」していたのであろう。今日、吉田の観測が正しかったことは「歴史」が証明していると言えよう。

その吉田による観測の根拠がラトヴィアからの情報であったということは興味深い。ソ連に関する正確な情報を入手するためには、ラトヴィアからの情報が極めて重要であったことがこのエピソードから窺えると言えよう。

日本に関して本で読んだことを見ましたが第一印象はショックを感じるもので私は自分が生活してゆくことは勿論、私にとって全く未知の環境の中でどうやって新しいビジネスを始めることが出来るのかと思ったものでした。

私は私がどうしてこの様に感じるのかを解るには私がお会いした皆様の助力なしには不可能であることをその後知りました。日本の方からは私の日本に関する第一印象は何であるか度々尋ねられました。今となってはそれが何であったか思い出せません。恐らく第一印象はこんなにも人口が密集している都会で果たしてプライバシーが保てるものなのかといった事だったかも知れません。私は来日以前にも大都市に住んだ経験もありましたが私としては東京では孤独を感じませんし、また一方において欲しささえすれば何時でも一人きりになれるということを申し上げたと思います。私は一瞥して日本を長期間に亘り滞在したい場所として受入れたという気持ちを覚えていますし、いま現在でもこの気持ちに変わりはありません。

私は日本に関して無知な状態でこれから新生活と新ビジネスを開始せねばならないという最初の気持ちを持って東京駅の前に立ったことは忘れられません。

私にとって最も困難であったことは日本人の誰一人としてラトビアとのビジネスについてはおろかラトビアという国そのものさえ知らなかったという事実です。ラトビアがEUに加盟し、一年前日本に大使館が設立されてからはそのような状況は徐々に変わってきました。

日本に在任中の4年間に私は北海道から沖縄まで日本中を数多く旅行しました。時として私が日本で最も友好的な親しみのある人たちに会ったところはどこかと尋ねられました。私は幸運にも行く先々で皆様から暖かく受け入れられたと思っています。

私にしてみれば温かく受け入れてくれた方々が関西あるいは北海道や九州出身であろうと大したことはありません。私は以前日本人は滅多に他人を自分の家に招くことはしないと読んだことがあります。しかしながら、この点に関しても私は幸運でした。地酒やその地方色豊かな食物を楽しみながら世間話をして過ごした夜を今でもすべて覚えています。

旅行中、私は日本の旅館や民宿あ

るいは宿坊にですら泊まるのが好きでした。それは地元の人たちと言葉を交わすためにでした。たとえ彼らの方言が全く理解できなくても…。例えば、屋久島の民宿に投宿したときがそうでした。私は観光客のための日本ではなく彼らの家を通してありのままの日本を見せてくれた凡ての人々に感謝しています。私はいつも旅行することが好きです。私見ではその国を知る最も興味深い方法は一人旅をすること、人々と会話をすること、そして彼らの日常生活を観察することで、外国人用の必見の所謂観光ルートのような場所の訪問を避け、その反対に自分自身で必見の且つ再訪したい場所を探しだすことにあります。

私は印象に残った多くの場所や行事を列挙することが出来ます。例えば次のようなものです。

式根島の海岸温泉、東京近辺での私の最初の登山であった雲取山、困難であったが絶景で報われた屋久島での登山、秩父の芝桜群生地、私の誕生日の東川への旅行、そこでは独力で陶器と和紙を制作したりカラオケ体験をしたこと、私の最後の熊野古道と伊勢神宮への巡礼、以上が直ぐに私の心に浮かんでくるものです。これが以外に沢山のすばらしい思い出がありました。

私はこれらの思い出となる場所や行事の瞬間を写真に収めようとしてしました。しかし、勿論残念ながら写真は瞬間の私の気持ちをそのまま正確に反映するものではありません。言葉は最も重要なものでこれを使用して日常生活とビジネス環境をよく理解できました。私は日本語の実際の利用を助けてくださった日本語教師の方々と日本の友人にお礼を申し上げます。同時にラトビアに友好的でラトビアとラトビア人が世界に知れ渡るように尽力して下さっている方々に対し同様に感謝申し上げます。斯かる方々の多くは日本ラトビア音楽協会を中心に交流して下さっており、私も幸運なことに協会員であります。協会員であることにより私は多くの情熱の持ち主との知遇とラトビアの真の友人を得ることができました。

私はこれらの方々に遠く離れたラトビアと日本が真に親密で友好国となるべく多大の貢献と時間を割いて御尽力して下さることに御礼申し上げます。日本あるいはラトビアで近々再会しますことを祈念します。

(翻訳: 原 健之)

日本ラトビア音楽協会の皆様へ

ジャネッタ スードニエツェ
(パレックス銀行)

在日Parex銀行の代表として私の日本での4年間の勤務契約期間が今般終了し、Parex銀行本店での勤務に復することとなりました。在日勤務中に私がお目にかかった凡ての方々に対しその御一緒させて頂いた時間と誠実で有益なお付合いを頂いた事に感謝いたします。

私は生まれて初めて来日した2003年11月の東京での初日を忘れ



昨年来日したピアニスト、ラウマ・スクリデ(右)とさんと筆者

ることが出来ません。勿論私は来日前に日本の事に関して多くの本を読みまた日本語を少し勉強しましたが現実私は日本に関して思っていた事とは全く違っていました。後日私が日本中を旅行した時に私は自分が

幻のアーリア人起源説 ラトビア人の深層心理

前在ラトビア日本大使館臨時代理大使
田中 享



前号ではラトビアにおける民俗学の権威から聞いたアーリア人起源説を記した。今回は後篇として同じ人よりラトビア人の古代からの精神風土や心理について聞いたことを紹介したい（アーリア人説が欧米ではいまだ機微な点があることと先方の名前を公表することにつき同意を得ないため匿名とさせて頂いたことをお許し願いたい）。

一引き続きラトビアの古代精神風土、文化、民俗学、神話学、文化史についてもっと話して下さい。

ラトビア古代の宇宙観には、根本に「山が宇宙の中心」という観念があります（注：筆者は須弥山思想を想起）。しかしラトビアには山は一切ないので、代わりに丘が尊崇の中心対象とされました。丘が尊敬の対象となった理由は、豊穣をつかさどる太陽へ一番近い頂点であるということ、天に一番近い場所であるという観念があったためです。ラトビアでは表面上のキリスト教の下層にアーリア人としての自然信仰と太陽信仰、豊穣への祈願などの原始宗教とが二重構造となっていること承知していることが大切です。ラトビアの古代の宇宙観が山を宇宙の中心としているのは、アーリア民族の伝説的な故郷といわれるコーカサスではヨーロッパ最高峰の高い山々があり、このような山への信仰が潜在意識として残っているためかも知れません。

（注。ここで筆者はラトビア人が歌祭りなどで丘を使うことが好きな理由の一つにこのような山や丘に対する民族としての深い心情が背景に

あることに感銘した。ラトビア人の歌心にどこかユニークなところがあるのは本来ラトビアの歌が大自然や天への祈りなのだからなのうか。識者のお教えをぜひ得たい）。

また四角や丸は宇宙を象徴し、東は再生、西は死、南は覚醒、北は停滞を含意するものと考えていました。また春は再生を象徴しています。この点ラトビアでは英訳するとグリーンマウンテン（青山）という地名がたいへん多いのです（注。バルト3国・中欧から米国へ移住したユダヤ人にグリーンバーグ（青山）という名前が多いことを想起）。一自然神についてお聞かせください。

ラトビアには愛の女神ライマと大自然の守護神の女神マーラがいます。ライマはアフロディーテのような愛の神です。他方、ラトビアの古代信仰では、かまど、家、井戸などいたるところに多数の自然神がおりその数は約850にも達します。このうちマーラ女神が最高位の神です。またキリスト教が布教されはじめるかとトリック教のマリア信仰と重なり合い次第に習合しました。このためラトビア人の宗教・精神生活のなかで最も尊崇される女神となりました。マーラ女神のお供と象徴はぶちの牝牛と蛇です。またマーラ女神はキリスト教以前の卍のような文様と波形の文様を属性としています。ラトビア人はマーラをたいへん尊びます。女の子の名前として一番人気のある名前として名付けられているのはご存知のとおりです。なおリガの

自由の塔の上にたつ女性神はリトアニアの愛の神ミルダの姿でマーラ女神ではありません。

一ところでラトビア社会は人類学上、女性系、男性系あるいは両性系どちらですか？ ちなみに日本は両性系です。

古代ラトビアでは豊穣がなによりも大切であったため初めは女性系社会でした。しかし13世紀にカトリックの教えが入ってくるとその強い男性重視の考え方に変えられていきました。結局中世から現在にかけてラトビアは日本とおなじく両性系の社会に移行しています。ヴェーチェ・フレイベルガ前大統領は当時欧州で唯一の女性大統領でした。欧州でラトビアが最も女性が職場に進出している国の一つであるのはラトビアが女性の強い両性系社会であるためです。実はラトビアは伝統的に家庭でも社会でも女性の強い社会なのです。

一ラトビア人の自然観や好きな庭園はどんなものですか。

ラトビア人としては自然を征服しねじ伏せたような英仏庭園は大嫌いです。そこで自然を大切にす日本庭園を尊敬し憧れています。またラトビアでは「聖なる森」「聖なる林」という信仰があります。樹では樅の木を尊び男性と勇気の象徴と考えています。これに反してライムの樹は女性を象徴します。なおラトビアではやなぎは悲しみを示しマーラ女神の精とされています。普通のラトビア人はこのような象徴の意味がわかります。なおダウガワ河のダウガバとは直訳すれば「たくさん水」という意味です。ですから意味的には「大川」ということです。

一ラトビア人の精神構造と心情についてもう少し突っ込んで聞かせてください。例えば古代アーリア人の信仰のようなものは残っているの

ですか。

はい。祖先崇拜信仰として残っています。第一に、ラトビア人は死者との魂の交流を強く信じています。ラトビアの自然信仰、精神生活では魂というものが最も大切です。特に死者とのつながりを強く感ずることが特徴です。例えば、ラトビアでは死んだ祖先が夢に現れて子孫にアドバイスをくれたりコミュニケーションをすると信じています。また秋には祖先の魂が実家に帰ってくると信じており、食事のとき死んだ祖先に食事を一緒にお供えする習慣があります。このように死者の魂に食事をお供えするとアドバイスをくれたり守ってくれると信じているのです。

第二に、ラトビアはいまだに古代信仰を保っていますが、その具体例としては11月最後の土曜日に「ロウソク祭り」という儀式として残っています。これは死んだ祖先をしのぶ慣習です。キリスト教にはドルイドとゆかりの深い10月31日の万聖節がありますがこれとは関係ありません。以上の点がキリスト教と違う点です。

一ラトビアでは自然崇拝からでしょうかと会うときには必ず花束を持参する美しいマナーがあります。その際必ず奇数の花をあげるのは何故ですか。

それはラトビアでは古代より「偶数」あるいは「一対のもの」は「ダイナミックな生成のサイクルが終わった状態」すなわち「停止、死」と考える観念があるためです。他方、「奇数」は「ダイナミズムの継続」あるいは「生への衝動」と考えるため奇数の花を贈るのです。いずれにせよラトビアと日本はともにきわめて自然を尊敬する心を持っている点で共通しているのは本当に興味深いことです。

当協会後援演奏会案内

風呂本佳苗ピアノリサイタル2008 （幼き日々へのお誘い）

1月14日（月・祝）14：00 東京オペラシティ・リサイタル小ホール

1月18日（金）19：00 兵庫県立芸術文化センター小ホール（西宮）

前売2500円、当日3000円

問合せ 090-3344-3465

※シューマン「子供の情景」、ドビュッシー「子供の領分」など子供をテーマにした作品で構成

東京稲門グリークラブ第3回定演

2月10日（日）14：00 杉並公会堂大ホール

S席2500円 A席2000円

チケット扱い 「びあ」

※松下耕曲「日本民謡3集」、多田武彦「雪明りの路」、清水脩「アイヌのウポポ」前田憲男の世界」

白井朝バイオリンコンサート

3月1日（土）15:00 神戸新聞社松方ホール

特別出演 岡村喬生（バス歌手）

出演 早稲田大学交響楽団、松川儒（ピアノ）

第4回総会・新年会のご案内

首題の件、下記の通り開催します。皆様の参加をお待ちします。

日 時 平成20年1月27日（日）

総 会 13時30分～

新年会 14時～16時

会 場 新宿三井クラブ

（新宿三井ビル54階・電話03-3344-5454）

会 費 男子 9000円 女性 7000円 ラトビア人 5000円

※ご家族ご友人の参加歓迎

※出欠のご意向を1月19日までに事務局へお知らせください。

※12時30分から理事会を開きます。顧問・オブザーバーの参加を歓迎します。

入場料4000円

問合せ0798-26-4338（安宅）

※バッハ、モーツァルトのバイオリン協奏曲、荒城の月他

ラジンさんの足跡調査

日本ボーイスカウト富士地区国際委員長
川島泰彦



2005年2月、ラトビアのスカウターでシルバーウルフ章授章者ベリザース・ラジンさんの足跡調査を開始した。ウルフ章を受ける程の人物ならその国の歴史に残っていいなくてはならないという私の考えからのスタートであった。

自分の1968年頃の日記やメモを引っ張り出し、記憶と照合しながらの作業だった。不安な点や自信の持てない部分は共に同時期アメリカに留学し、ラジンさんの教えを受けたオーストラリア、プリズデン市在住の親友、岡田利勝氏に確認しながら行った。岡田氏は世界レベルの技術者でGE社、モトローラ社、IBM社などでその能力を発揮した人である。

数ヶ月を要し、ラジンさんの経歴書の骨格が完成した。しかし私達はこの経歴書の客観的な信憑性を確かめなかった。

05年7月、外交ルートとボーイスカウトルートで世界にラジンさんを知らないかと発信した。反応の全くない状況が何ヶ月も続いた。06年4月、東京に史上初めてラトビア共和国大使館が開設され、ウルフの物語を知ったバイバルス初代大使と在ラトビア全日本大使田中享氏が富士市を公式訪問された。その際お二人にラジンさんの調査を依頼した。

それから3ヶ月後の9月のある日、田中前大使より第一報がもたらされた。田中氏の知人ラトビア人のビト

ルス氏からのメールが転送されて来た。ビトルス氏はシベリア送りなどで行方不明になった何十万人ものラトビア人の消息を調査している財団責任者である。その友人、ザデンバーク氏がラジンさん情報の提供者であった。

《第一報》

ラジンさんは1935年頃までラトビアボーイスカウトの指導的立場にあり、農業の専門家で農務省高官であった。ソ連侵略を受ける以前、ラトビア最後のウルマニス大統領(1877～1942)の側近で、4Hクラブ設立のため大統領からその責任者に任命された。

より詳しい人がいると言って、アメリカ、ミシガン州デトロイト市在住で八十代後半のルジテス氏を紹介して頂いた。質問状については田中氏より非常に丁寧な指導を受けた。10月下旬、デトロイトのラトビア人協会会長ルジテス氏からの返事によりラジンさん調査は大きく進展した。高齢にもかかわらず、しっかりした内容であった。

《ルジテス氏からの手紙内容》

あなたからラジンさんとの友情の手紙を戴き、大変嬉しく思います。彼とは農務省で共に働いたことがあります。彼は偉大なラトビア愛国者で誠実な人柄で知られていました。

ラジンさんは1904年8月3日、北

部アルクスネ市で生まれ、ニューヨークのロンビア大学とラトビア大学で農業の学位を取得しました。ボーイスカウト創設期、その指導的立場にあり、27～34年YMCA責任者、雑誌の編集長も務めました。34年ウルマニス大統領に4Hクラブ創設責任者に任命されました。ソ連軍の侵略、占

領でボーイスカウト、4Hクラブ共に解体され、戦中、ドイツを経由してアメリカに渡り、1973年3月22日他界するまでシアトルYMCAで働きました。

ルジテス氏からの情報で最大の収穫は、33年8月18日、ベーデンパウエル卿(世界のスカウト達は親しみを込めB-Pと呼ぶ)夫妻のリガ訪問時の写真訪問時の写真(インターネット上で富士地区のスカウターが発見)出迎えラトビア政府要人の中にラジンさんを指摘してくれたこと、その首にウルフ章を確認できたのである。

オーストラリア調査は親友岡本氏なくしてはなし得なかった。東京の大使館からラトビア人協会の紹介を受け、そこからメルボルンのスカウター、ベジンス氏が紹介された。ベジンス氏は岡田氏の依頼で熱心に調査を行い、図書館で「ラトビアスカウト40年誌」(1960年発行)を発見、その中に何個所かラジンさんについての記述を発見した。ベジンス氏は会ったこともない私のため、図書館で本を借り自分の責任で日本へ送付



1933年8月、ベーデン・パウエル卿夫妻(中央)リガ訪問時の写真 右端がラジンさん(首にウルフあり)

してくれた。彼のスカウターとしての厚い友情に感謝を捧げた。11月のことである。私が本をコピーし直ちにオーストラリアへ返送したのは言うまでもない。

《ラジンさん記述部分の一部》

1. 18頁、28頁 ラジンさん指導の下、北東部アルクネス市で1918年スカウト隊発足。
2. 104頁 27年ラジン氏は英国だけではなく、ラトビアの要素も教育に導入すべきと主張
3. 116ページ リガ地区コミッショナー就任
その他多数。

これまで述べた外にも世界から様々な情報が私の下に集まっている。9月から一斉に情報が集まり、ラジンさんの足跡調査は大きく進み、経歴書の新事実を記入したり、訂正をしたりしてその信憑性は高いに高まった。世界の人々が快く協力してくれるのはラジンさんの人柄のせいか、彼の強い愛国の情がウルフに乗り移って人々を動かしているのだろうか。足跡調査をしていて、そんな気がしてならなかった。

山本健二さんの リサイタルを聴いて

大澤寛之



12月8日(土)に山本健二さんのリサイタルを聴きました(王子ホール)。私はほぼ毎年聴いていますが聴くたびに感動が新たになります。今回はこの紙面を借りて私の想いを書かせていただきます。まず感じるのは山本さんには委嘱作品が非常に多いことです。今回も森繁久弥の詩「潮騒のうた」を平野純一さんに作曲を委嘱し初演されました。過去にも松尾芭蕉の「奥の細道」、北原白秋の「邪宗門」、西行の和歌による「西行歌遍歴」、「金子みすゞを歌う」、福岡高校の生徒による「くちなしの花」など各CD1枚分もの曲を委嘱す

るなど普通では考えられないことです。そもそも金をもらって歌うのがプロの歌手で、自分で大金を出して歌わせてもらうなど考える人は殆んどいないでしょう。山本さんの歌は、金のためではなく自分が人に伝えたい想いがこもった歌だけを歌う姿勢が貫かれています。それだけに山本さんの想いが感動となって伝わってきます。山本さんの歌の世界は詩の本質そのもの、詩に始まって詩

に終ると言えます。例えばこの日の第一曲は「この道」でしたが、ご存じの通りこの詩は4番まで描かれている世界が違いますから表現が同じはずはありません。2行目の「ああ そうだよ」の「ああ」という言葉は感嘆詞であったり、単なるあいづちであったり、ため息であったり、使われる場所によって意味は異なります。山本さんは各節の表す情景に応じて音の強弱だけではなく声の色まで変えて表現されました。まさに各場面の情景が鮮明に目にうかがい感動的な名唱でした。もう一つは最後に歌われた「荒城の月」です。これも4番までありますが、この単調なメロディーを4回も歌うとお客さまが飽きるだろうなどの理由で3番を省略する人がいますが、とんでもないことで詩の世界を全く考えてないと言わざるを得ません。これは絶句と

言われる中国唐の四行詩の作法にある起承転結を備えています。一番は起で昔の栄華の時代の春の宴を回想し、二番でそれを受けて清冽な秋に拡大し、三番で転じていま目の前にある城跡を眺めて悠久の時の流れに想いをいたし、四番の結で栄枯盛衰を繰り返すこの世の無常を謡うというのがこの詩の世界でしょう。三番を省略などすれば詩のバランスを欠き、何を言わんとしているのか分からなくなります。逆にそれを考えずに一番から四番まで同じ表現で歌ってはお客さまが飽きるでしょう。これらのことを山本さんの歌は心憎いばかりに見事に歌い分けてします。これが何時何度聴いても感動を新たにする源泉であろうと思います。今後ともご活躍くださることを切望しています。(早稲田大学グリークラブOB)

ラトヴィアにおける 日本語教育事情

ラトヴィア大学日本語講師
黒澤 歩

リーガには、現在6つの日本語教育機関があります。次のように分類するとわかりやすいでしょうか。



1. 公立機関

(1) 「リーガ文化学校」

小・中・高校が一緒となった義務教育の学校であり、第二外国語の選択の一つが日本語です。ほぼ10年前に創立され、邦人教師はボランティアベースで少なくとも一人が働いてきました。日本語のほか、中国語にも力を入れており、またスペイン語やフランス語など、第二外国語として多様な言語学習を提供していることを特徴とする学校です。

(2) 「国立ラトヴィア大学現代言語学部アジア学科日本語コース」

学科名は「日本語」ではなくあくまで「日本学」です。日本語教育は基礎知識という扱いです。日本語のほかに、日本文化史、東洋文化史、文化人類学などが必修となっています。昨年度からEUのポローニャ条約に対応して、学部3年制となりました。現在は、1年生約50名、2年生約20名という構成です。毎年、学生は淘汰され、学生数は減少していきますが、それでも、ラトヴィア大学全体での日本学コースは中国学コースと共に競争率が7倍近い人気の学科であり、いわゆる大学にとっての「ドル箱」とも呼ばれています。ちなみに、同じアジア学科にはトルコ語とアラビア語の専攻コースもあります。

現時点、ラトヴィア大学で日本語教育に携わっているのは、自分を含めたボランティアベースの邦人教師二人と、現地人の卒業生一人ですが、学生数急増に対する人員不足を補うため、日本文化史を専門とするラトヴィア人講師も日本語の基礎を教えています。授業科目は文法、応用、会話、漢字に分類されています。

同日本学コースは、早稲田大学、山形大学、関西外国語大学、そして近年では筑波大学と協定を結び、この秋にはこれらの大学すべてに同コースの学生が留学することになるでしょう。日本で知名度の低いラトヴィアへの邦人留学生は少なく「交換留学」は実現していませんが、今年



天皇后両陛下をラトヴィア大学でお迎えしたラトヴィア大学日本学コースの学生（一部）と講師の橋本沙里さん

度は早稲田大学から経済専攻の学生が一人留学していました。

2. 私立機関または個人ベース

(3) スタジオ「言語」

日本語の独学者であるブリギッタ・クルーミニャさんが、独自に設立したプライベートの機関であり、年齢を問わずに有料で教える言語学校です。

(4) パルティック・ロシア・インスティテュート

私立の大学としてはリーガでも人気のある大学で、ロシア語とラトヴィア語で科目が教えられています。ここで数年前からボランティアで日本語を教えている邦人教師のもとで、単位取得を問わない学生の希望者が対象です。

(5) 文化アカデミー付属ノルディックセンター日本語コース

文化アカデミーは国立機関ですが、付属のノルディックセンターでは、学生以外にも広く希望者を募って有料で外国語が教えられています。ノルディックというからには北欧言語がメインですが、そこになぜか日本語も含まれ、邦人教師が一人います。

(6) カッタイ先生の日本語教室

ラトヴィアの日本語教育の基礎を立ち上げた日本語通訳翻訳の重鎮であるカッタイ先生の元で、かなり以前から続いている日本語教室です。2000年に在ラトヴィア日本国大使館が開設されてからは、毎週水曜日に大使館の広報室が提供されるようになりました。年齢を問わず、日本語に興味がある人ならだれでも参加できるようです。



日本語は従来人気があり、この他にも、私設の言語学校で日本語が教えられているようですが、私はそこまで把握できておりません。そうしたことも考慮すると、ラトヴィアにおける日本語学習者数は不特定多数にかなり広範囲に広がっているようです。近年ではインターネットを通じたテレビのバラエティー番組、漫画、アニメ、ゲームのサブカルチャーが、若年層の関心の発端となっているようです。

「ラトヴィア語教室」 第一期終了

当協会とラトヴィア大使館共催で6月から始まった「ラトヴィア語教室」が12月19日、大きな成果を残して第一期を終了、堀口大樹講師から受講者一人一人に受講証が渡された。

教室が大使館公邸で、毎回在日ラトヴィア人がゲスト参加するという贅沢な語学教室。この日もアナ・シルスさんが、在外ラトヴィア人について極めて充実した内容のスピーチをした。

第一期が大成功に終了した最大の功労者は熱心に指導を続けた堀口大樹氏で、欠席者に1〜2日後には授業で配布した資料や講義のポイントを送付する徹底ぶり。さらに事務局を担当した植木佐代さんが完璧にフォローした。テキパキした推進力ときめ細かい配慮で、教室が終始和気あいあいに進められことも大きかった。

この日は最終日とあって講義終了後懇親会が開かれた。職業も年齢も性別も全く違う人たちが、一緒にラトヴィア語を学ぶことで見事な一体感が生まれたことも大きな成果だった。



受講終了証を手に喜びの受講生

た。

第2期 募集中

このプロジェクトは平成20年度も継続され、第

2期受講生を募集している。第2期は、引き続き受講される方のための「初級コース」と、新しく入会される方のための「入門コース」の2コースになる。原則として初級コースは第1・第3水曜日、入門コースが第2・第4水曜日の18時半から20時で、場所は何れもラトヴィア大使館。定員はどちらも12名。受講料は入会金3000円（継続者は不要）と月3000円（6ヶ月12回で18000円）。お問合せとお申込みは03-3751-0134（事務局・植木佐代さん）へ。



情報断片

○…12月某日、外務省の日本語研修センターに派遣されて帰日した黒澤歩さんと初めてお会いしました。紙面に度々登場願っているので旧知のように親しく歓談しました。予想通りの美しい才女でした。ラトヴィアに於ける日本語教育にかけがえのない存在ですが、やはりお父さんも教育者だそうです。若くして単身ラトヴィアへ出かけ、ラトヴィアに完全に溶け込んだアドベンチャー精神に感嘆の他ありませんが、現地のホットな音楽情報を定期的に伝えてくださいとお願いしました。

○…創立100周年を迎えた早稲田大学グリークラブが11月20日夕、現役・OB800名が大隈講堂前で「校歌・都の西北」などを大合唱して大勢の観客から大喝采を浴びました。この日の模様はテレビや新聞も大きく報じました。100名を超える現役の100周年記念定期演奏会は12月2日に恒例の厚生年金会館大ホールで行い、小田和正氏や上田真樹氏への委嘱作品などを演奏し、超満員の聴

衆に男声合唱の魅力を堪能させました。OBも今秋、総力を結集した記念演奏会を開きます。

○…グリークラブの同期・山本健二君の指導がラトヴィアで絶賛を博したのは嬉しい情報でした。入部した最初の練習で偶然横に座ったのが彼でした。“グリーには凄い奴が入ってくるんだな”と感嘆した記憶が鮮明にあります。3年後、彼は当然のように学生指揮者に選ばれましたが、今日まで彼の優れた音楽から刺激をいっぱい受け続けています。

○…年末はギリギリまで本業に追われて本号の編集作業が遅れ、年明け早々に印刷して10日頃発送します。そのために1月7日に目黒パーシモンホールで行われる「ケイコ・ポールジェソン」ニューイヤーコンサート「ジャズ私の魂」の案内が間に合いませんでした。『華』で協演される水谷鏡子さんも熱心な当協会会員です。

○…という訳で今号は謹賀新年号になります。今年もよろしく願い申し上げます。皆様にとって実り豊かな年になるよう祈ります。（徳）



私たちは人びとの健康を高め
心豊かな社会づくりに貢献します

 **大鵬薬品**

<http://www.taiho.co.jp/>